

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

一発ネタ 仮面ライダー電王とオレ、転生！〜

【作者名】

行方不明

【あらすじ】

神様によって転生した主人公。主人公が行くのは過去か未来か……それとも？

息抜きに書いた仮面ライダー電王の一発ネタです。続きません。

一発ネタ 仮面ライダー電王！オレ、転生！

拝啓 向こうの世界の皆様

現在の吾輩は光の玉である。名前はもうない。

敬具

いや、冗談ですけどね？なんでオレがこんなことになっているのか
といつと……

君死んだから転生させるよ〜！どこがいい？

電王の世界！オレもオリジナル電王になれるようにして！凄い強
い奴！

いいよ〜！

という噂の転生を果たしたんです！いや、実際のこととは覚えてない
んだけどね？けどさ…絶対にこうなるとは思わないよね？電王にな
れるって言ったたら良太郎やNEW電王の光太郎を思い浮かべるじゃ
ん？確かに電王として主に戦っているのはイメージだったよ？確か
に最終回辺りやさらば電王ではイメージが電王に単体で変身してた
よ？だからと言って誰がイメージになりたいって言ったよ!?オレは
人間やめるつもりはなかったんだよ！イメージになったせいでオレ
ツエー計画がパーだよ！

おまけに契約したらデンライナー組に敵と間違われるからできな
いし！契約しないと光の玉のままだから喋れないし、美味しいご飯も

食べれないしでもう散々だあ！ってアレは……。

「はっ……はっは……よし……もう少して新記録……。」

死にかけの主人公良太郎を発見しました。っていうか遅い。トレーニングとしてジョギングしているんだろうけどハッキリ言って遅い。やんなくても変わんないよってレベル。頑張っているなあ。

「はあ、はあ、よしなんとか新記録が出た！」

って言っている場合じゃない！この隙に憑かせてもらおう。前例があるしうまくいけばそのままにしてくれるかもしれない！主人公一行に入れば合法的？に暴られるし！よしそうと決まればお邪魔します！アレ？意外に狭い……ここにやる！

「え？え？な、何？」

うづくぐ……頭(感覚的に)がつかえて入れない……おりゃああ！ど根性お！

「痛っイタタタ！ってよし！入った！うわあすっげー久々の体だあ」

『イタタタ……君誰？イマジンだよね？』

「よしよし。ん？オレ？つぶ。オレは通りすがりのイマジンだ！覚えとけー」

よし、このネタ決まった！

『だからイマジンだよね？』

「……そうですね。イメージです。まあ、ちょっと体貸してよ。大丈夫！悪いことには使わないから！多分。」

『今多分って?』

「よしレッツゴー!」

『ちよつと待ってよ〜!』

やった!やった!久しぶりの体だ!さ〜て何を食べようかな〜。
ラーメン?ハンバーグ?久々のご飯だあ!

「おい!お前!良太郎をどうするつもりだ!」

ってアレ?なんかうるさいな〜無視無視。ワタシ、イメージン語ワー
カリマセーン!イマのワタシニンゲンデスカラ〜ハハハ!

「おい!無視してんじゃねえぞ!おい!聞いてんのか!」

「うるさいなあ!久々のご飯タイムを邪魔すんな!赤鬼!」

「誰が赤鬼っておア!」

アレ?どっか消えちゃった。まあいいか静かになったし。とりあ
えずまずはラーメンだな!レッツゴー!

「すみませーん!照り焼きハンバーガー!」。

「すみませーん！DXハンバーグ一つ！」

「すみませーん！とんこつラーメンと醤油ラーメン一つずつ！」

「すみませーん！豚玉お好み焼きとDXお好み焼きを一つずつ！なるべく早く！」

ふー食った、食った。なんかすごい落ちぶれた店だったな。すごいうまかったけど。

それにしても二万円分くらい食ったか？一食二万とは大変だな。
良太郎。

『使ったの君だよな？それにどうして僕の名前知っているの？』

……しまった。ドジった。えーっと言い訳……言い訳……。

『ねえ、どうして？』

「ほ、ほら電王って有名だからさ？調べたんだよ！個人的に！」

『ふーん。』

良かった。なんとかごまかせたか？やれやれ。

「居た！アンタ！良太郎をどうするつもり？」

「おりゃ？ハナさんだ。」

「……どうして私の名前を知っているの!？」

やべえ、またドジった。

「良太郎から聞いたんだよ。」

「ってそうだ良太郎！アンタ、良太郎をどうするつもり？まさかリユウタみたいに……。」

「って、違う！違う！君達って電王だろ？だから仲間に入れて欲しくて……。」

「……。」

「どうした？」

「怪しい。」

なんかすごい警戒されているんですけど。なんで？

「ど、どどどが怪しいんだよっ。」

「大体、それなら素直に言えばいいのに、わざわざ良太郎の体乗っ取っているしでかしているあたり信じられると思っっ。」

「……おっしやる通りです。」

マズイ。反論できん。

「おい！お前！良太郎の体を返しやがれ！」

「あ、赤鬼。」

「誰が赤鬼だ!」

「先輩無駄だつて。先輩はどう見ても赤鬼でしょ?」

「そうそう!桃の字は赤鬼や!」

砂のバケモンがなんか増えた。いや、良太郎のイメージズなんだけどね?アレ?リュウタロスがない。この前公園で踊っていたからもういるはずなのに。

「って、そんな」と言っている場合じゃねえ!行くぞお前ら!良太郎の体をかゝえゝしゝやゝがゝれゝ!」

「あ、先輩ちょっと待って!」

「って、ちょ、ちょっと待って!……アレ?」

三人……三匹?が突っ込んできて砂になつて崩れた。アレ?なんか知らないけどオレが憑依している間って他のメンバーは入ってこない?

「ちょっとあんたたち大丈夫?」

「なんでや?なんで付けないん?」

「うち!また小僧と同じパターンかよ!」

何か言っているが今のうちに説得を!ぜひオレツエー計画を再浮上させるんだ!

「待って！待って！別に悪いことしたいわけじゃないんだって！」

「なんだと？」

「オレは要するに電王になって派手に暴れたいだけなんだって！」

「……これって先輩と同じパターン？」

「じゃあなんで良太郎に憑いているのよー！」

「いや、久々に美味しいご飯が食べたくなって。」

「久々？」

「あつ……まあ、そういうこと。つい目の前に体があつたら好きにしくたくなるよね？ね？」

ハナさんはなんか胡散臭そうな顔で見ているけど他の三匹は心当たりあるのか顔を背けてる。いい加減答え聞きたいんだけどなあ。

「だからってなんで電王？普通に契約者探して暴れればいいじゃない
」！

「いや、人の願い聞くのってなんかめんどくさいし。それにそうやって暴れたらあんたらに倒されそうな気がするし。」

「……。」

あつ！なんか胡散臭そうな顔から呆れて胡散臭い顔になってる！
よし、ここで全力全開必殺技を！まずは一回離れて……アレなんかキ

ツイナ。グググ……

「ググ……痛い！痛い！ってアレ？」

「良太郎？元に戻ったの？」

「うん。そうみたい。でも、あのイメージは……？」

「そうだ！あのクソイメージそこ行きやがった!？」

「アレじゃないの？」

「「「「アレ？」」」」

「なんか変なふうに動いているけど……。」

「いや、ちょい待ち！なんか伝わって「ううへん？」

「伝わってって……あ！あれって文字じゃない？」

「「「文字？あ、確かに……」」」

やっと気づいた！転生してからこの方暇に暇を重ねて作り出した奥義！必殺！動いて文字書く！ちなみに内容はよろしくおねがいます。まだ平仮名と簡単な漢字しかできません。

「よ……ろ……し……く……お……ね……。」

「……が……い……し……ま……す……？」

「「これって頼んでるのじゃないのかな？」

「とりあえず、デンライナーに連れて行くのか？」

「って良太郎正気か!？」

「良太郎本気？」

「う、うん。なんか付いている間悪い人には見えなかったし……僕と
いろいろ話していたし……。」

「マジかぁー!？」

やった!これでオレツエー計画スタートできる!よし次は……

「あ、また何か動いてるよ?えーっとなになに……ありがと
う……?」

「……変な奴。」

「うん。ちょっとね。」

なんか外野が何か言っているけどやったよ!別世界のお母さん!
オレやったよ!やったー!

すっげー!本物のデンライナーだー!

「列車なんてすっげー久しぶりー!」

「久しぶり?」

「あ、いや、なんでもない。」

「それより、その羽邪魔！尻尾も！」

「うん。確かに自分自身これ鬱陶しく思った。オレってどんな姿をしてんの？」

「え？えーっと……。」

「はい！コーヒーです！あ、私はナオミって言います！よろしくねー！」

「あ、ありがとうございます。すみませんオレってどんな感じなんですか？」

「えーっと〜なんというか……真っ黒なドラゴン？」

「ドラゴン？」

え？リュウタロスと被ってね？いや、龍と竜だけど。

「そういえばそうも見えなくもないような……？」

「本当に俺はどんな姿してんの!？」

「でも竜だとリュウタロスと被るし……。名前どうしようか？」

「被る？お前僕の真似したな!？」

「いやいや、そんなこと良太郎に言ってくれよ!？」

今まで静かにお絵かきしてたのに急に出てきたな!?

「あーじゃあ……ドラゴンスってのはどうですか!?

「ただスをつけたただけだよね!?

「良いと思っよ。」

「誰か別の名前を!」

「っへ! いいじゃねえか! 破れコウモリには十分な名前だ!

「黙れ赤鬼!」

「っな! 誰が赤鬼だ! いいか俺は……!」

「先輩さっきも言ったけど先輩は傍から見れば完全に鬼ですよ?」

「なんだと〜このかめ!」

……なんかいいなこっぴう賑やかなの。こっぴうのって転生してから経験しなかったからな。

「どうしたの?」

「ん? いや、ちょっとこっぴう賑やかなのっていいなって思って。」

「君本当にイメージン?」

「そうですね〜今の俺はイメージンですよ〜」

あ、ハナちゃんにパンチもらって二人が気絶した。いや〜強いな〜。それにしてもナオミちゃんって煽るだけ煽って常に安全圏にいる。一番いいポジションだな。

なんかみんな笑ってスゲー楽しそうだな。……やばい。今ちよつとだけホームシックになった。向こうの友達や父さん母さん……みんなに会いたいなあ。会ってこつやって賑やかに……。

「大丈夫？」

「なんで？」

「なんか……泣きそうな顔してたから……多分。」

「きつと気のせいさー！」

「そう……っ？」

「今度はどうした？」

「いや、ちょっと今君が人間に見えて……」。

「……ひでえな〜良太郎は！イマジンだって一応人なんだけどな〜。」

「あ……ゴメン。」

よし。逸れた。しかし、なんかボロ出しまくりだな。オレって実はうっかり属性持ちだったのか？

「どい行くんだ？」

「もう帰るよ。」

「そっか。んじゃまた。」

「うん。またね。」

やれやれオレも寝るかね？

「……………うんわい。」

モモタロスとキンタロスのいびきがうるさくて眠れん。他のメンバーはよく寝れるな。ってあっ！ウラタロスとリュウタロスがいない！アイツ等知っててオレを放って置きやがったな！……………少し散歩してくるか。

「しかし、時間の中なのに夜があるんだな。カテゴリーミスメイクだる。アレ、ちょっと違うか？まあいいや。」

クリスマスとか正月もあったしな。まあ元々子供向けの番組だからそのくらい考えてないのかもしれないけど。

「それにしても……………人間に見えた……………か……………」

時間の風景を見て、ここはオレの生まれた世界とは全然違っつてハッキリとわかる。こんなものオレのいた世界にはなかった。好きな世界に来れることに浮かれて喜んで。この世界に生まれて。生まれてみたらイマジンだったことに絶望して。

「多分…向…向…向の皆がオレのこと見ても…オレだって気づいてもらえ

ないんだろつな……。オレって……人間……なのか？」

……やめやめ！こんなこと考えたって無駄だし！そうだ！今なら良太郎は寝てると思うし少し遊ばせてもらっつかない！

「よつと……アレ？なんかあるな……ん……邪魔！よし入った。」

「ここは……なんだろ浜辺？あ、女性が倒れている。ってことはウラタロスが入ってたのかな？まあいいや。どこに行こうかな？」

『僕眠いんだけど……。』

「……あれ良太郎起きてたの？」

『君が入るときってかなり痛いんだよ。』

「ゴメン。まあいいや、ついでに貸してよ！ちょっとどっか行ってくるー。」

『ねえ？』

「なーに？」

『君はどうしてそんな辛そうなの？』

「……見間違いない？」

『そうかもしれないけどさ。君が暴れたいって言った時も、今も、なにかをこまかしているように僕には見える。君に何があったのかは知らないけど……。』

「……さい。」

『いつまでも逃げていればいいってわけじゃないと思うんだ。』

「うるさい！人のこと何も知らないくせに！黙ってる！気分悪い！もう帰るー！」

『痛い！痛っ！ってあれ？ドラゴンズ？』

……気分悪い。自分で分かっていることを他人に言われるってスッゲー腹立つ。っていうか、そろそろ朝だしデンライナーの食堂でやけ食いでもするか。

「ドラゴンズ機嫌悪そうだけどうしたの？」

「分かんないです。今朝からあの調子で。」

「ゴメン。ちょっと喧嘩しちゃって……。」

「聞こえてるぞ。その人間三人組。」

「」「」「あはは……。」

「っは。破れコウモリが拗ねているだけだろ。」

「ダメだよ先輩。後輩には優しくしなくちゃ。」

「なんだと？」

「桃の字やめとっけて。どうせすくなおるやろっしなー！」

「リュウタはどうかしたの？」

「あの偽物嫌い。昨日せつかく良太郎の中にいたのに追い出した。」

「ああ。アレは少し乱暴だったよねえ。」

「っておい！亀！小僧！てめえらまた勝手に良太郎に憑いたのか!？」

……ひどい言われようだな。っていうか真面目にチャーハンを十皿食っただけでどうしてこんなに騒がれなくちゃなんのだ。
……はあ。寝不足だし、少し寝るか。

「おりゃ？寝ちゃった。」

「本当にどうしたの？」

「うん。ちょっと朝に気にしていることを言っちゃったみたいで……。」

「放つとき良太郎。勝手に立ち直るのが男ってもんや。」

「そうそう。放っておくのが一番だよ。」

「……分かったよ。僕は一度戻るよ。姉さんと約束しているし。」

これどんな状況？いや、起きたら赤鬼がいなかった。皆なんかそわそわしているし。包帯だらけだし。

「どっなってんの?」

「あ、ドラ……今すごい強いイマジンが現れて、そのイマジンを追って過去に来ているの。」

「で、なんでこんな通夜みたいな空気になってんの?」

「それは……。」

「ワシらが……歯が立たんかったんや。」

「マジで?」

おいおい。終盤クラスの敵が出張ってきたんじゃないだろうな? あ、見えた。あゝホントだ。見たことのない蠍人間みたいなイマジンがソードフォームの電王圧倒してる。すげーな。あ、リュウタロスに変わった。……でも分が悪そうだなあ。

「……ドラはいかないの?」

「なんで?」

「だって暴れたいって……。」

「確かにオレは暴れたい。でもな……自分がボロボロになるリスクを負ってまで暴れたいとは思わない。」

「……それって?」

「戦うってことは「いついつ」とかは知っていた。でも本当に理解していたわけじゃなかったんだ。……怖いんだよ。」

「…………。」

今まで喧嘩もしたことがないような一般人だったんだ。オレはオレツエーがしたいだけで、あんな風にボロボロになるまで命懸けで戦おうとは思わない。自分が消えるかもしれないのに戦いなんて……嫌だ。

「っは。とんだ腰抜けだな。」

「なんだと？」

「そうだろ？傷つくのが怖いから戦えないってか？そんなテメエなんか腰抜けで十分だろうが……」

「…………言いたい放題言わせておけば！」

「だったら！何か言い返してみろよ！」

「つく…………。」

「できねえんだろ！腰抜けは隅で震えてろ！」

「うわぁ！」

「リュウタ！ってことは…………今良太郎一人？」

「マズイ！良太郎！」

「っち。オレが行く！つくう！いてえ！」

「先輩その怪我じゃ無茶だよ！」

「良太郎一人で戦わせる方が無茶だろうが！」

「……………」

なんでだ？なんで勝ち目がないような相手に戦い続けられるんだよ？どうして武器もないのに……代わりに戦ってくれる相手もないの？どうして……………つち。

『良太郎聞こえるか？』

『ドラゴンズ？ゴメン後にして。』

『いいから聞け。どうしてそんなになってまで戦うんだ？良太郎は弱いし、運もない。知っているぞ？』

『…………昔ある人が言っていたんだ。弱かったり、運がないからってそれは何もしない事のいいわけにはならない。』

『オレが聞きたいのはそういうことじゃない！死ぬかもしれないんだぞ！どうしてそんなに平然と戦える？！』

『どうしてだろうね？分からないや。でもこれだけは言える。ここで逃げたら絶対に後悔する。だから戦うんだ。』

『…………』

「ドラゴンズ？ってうわあ！」

「何止まってんだよ！雑魚がア！いい加減にくたばれえ！」

……そういえば、良太郎が死ねばオレも消えるのか。流石に二度目の転生……はないか。それは……嫌だなあ。戦っても死。戦わなくても死。……転生したことを後悔たくはないな。っていうか、したらなんでオレが生きているのか分からなくなるな。

……大丈夫。番組では上手くいったんだ。きつとこの一度だけ。一度だけを戦えば、オレの出番は無くなる。ジークみたいなものだ。神様特別製の転生者だ。大丈夫。オレは死なない。オレは死なない。よし。行こう。

「離せっておい！何処へ行く！」

「ちょっとだけ、腰をはめに行ってくる。」

「はあ？おい、どついう意味だ？」

「多分、先輩が腰抜けて言ったからじゃないかな？」

「え？ドラ！ちょっと待ちなさい！」

「もう出て行っちゃたけど？」

「ふん。これで終わりだ。」

「う……。」

居た居た。あ、変身解けてる。まあ、丁度いいや。馬鹿にしてたけど電王のモモタロスさん仮面ライダーの中でも好きな方でした。今だけでいいので力を貸してください。ヒッヒッフーヒッヒッフー……よしOK。……行くぞー！

「う、え？何って痛い！」

「何をごちゃごちゃ言っている！死ねえ！」

「痛い……ってあぶねっ！危ないだろうが！」

「何を今更なことを……言っただよお！」

「やっぱり怖い！って、いつか変身、変身……どうやって？」

やばい肝心なこと忘れてた。パスは……ある。ベルトが……ない。詰んだね。っていつか真面目にやばい！いつまでも避けていられないし……。

『ドラゴンズ何やっているの！』

「ベルトってどう出すの！？っていつか、助けに来て難だけど助けて！」

『ええ！？ベルトは念じれば出るよ！早く！』

「死ぬー！絶対に死ぬー！」

ベルト出ろーベルト出ろー出た！アレ？なんか基本の電王ベルトと違う。……まあいいや、当たって砕けるだ！腰に付けて……あぶねっ！今掠った！

「よし、行くぞ。変身！」

《Dragon Form》

「オレ！参上！」

「っちまた変わりやがって……！」

初変身はこんな状況だけど興奮した。でもさ、窓に映った姿を見たけど……ウィザードのオールドドラゴンに近いつて言えばいいのか……電王のガンフォームとオールドドラゴンを掛け合わせて黒くしたっていつか……ぶっちゃけると中途半端臭が凄いです。

「グアアアアアアアア！」

「ぐ……っは。そんなけおどしにビビるわけないだろうっ！」

おおすっげ。ちよっとできるかな？と思って鳴いたらそこら中の窓割れたし、敵が吹っ飛んだ。お？爪や羽、尻尾も伸びる。よし、相手が来るのに合わせてっ！

「ドラゴンテール！モドキだけど！」

「グアア……いい加減にしろっ！」

せっかく尻尾で吹っ飛ばしたのにまた来たよ。そのままだったら良かったのに、っていつか速い！

「ちよっぴタンマーっ！」

「するわけがないだろ！」

「ドラゴンウイング！」

おお！我ながらすごいな。この羽。伸ばして体を包んだらイメージの飛び蹴り直撃しても無事だったし、広げたら逆に吹っ飛ばしたし。

「つく。ふざけた名前ばかり付けやがって！」

「今だードラゴンクローー！」

って腕が！腕がア！いや、敵のだけど。もげたア！気持ち悪い！もうヤダ！さっさと終わらせよう！帰って寝たい！尻尾でもう一度吹っ飛ばしてっと！パス〜パス〜よしチャージ！

「つく。テメ…エ…！」

《Full Charge & Maximum Boost》

「行くぞ？ドラゴンズ……プレス！」

「がああああああああ！」

お約束の爆発。なんとか倒せたか。っていうか何あの必殺技？胸辺りのドラゴンの顔からビームが出たけど、それ以外にもなんか十匹ぐらいの竜が出てきて一斉掃射しているところ見てたらなんか敵が可哀想になった。清々しいまでのフルボッコ技だったんだけど。

『あの技って……。』

「戻ろうか。何も考えるな。とりあえず無事に生きていることを喜ぼう。」

『う、うん』

「ただいま……。死ぬかと思ったあ。」

「ドラちゃんやりましたね！」

「っへ、やれば出来るじゃねえか！」

「だからいったやろ！男はみんなやるもんや！」

「モモタロス！皆も無事でよかったよ！」

アレ……。なんか急に目の前が……。

「おう！良太郎！っていうかおい！破れコウモリ！お前オレのセリフを盗るんじゃないやねえ！おい！聞いているのか!?!」

「おい？ふう。先輩無駄だよ。」

「何がだよ？」

「立ったまま気絶してる。」

「なにイ!?!」

「あ、倒れた。」

「痛っ？この羽と尻尾ホント邪魔！」

「ぐふっ！」

「……おい鼻くそ女。今の……止めだったんじゃねえか？」

「え？ね、ねえちよつと！」

あ、なんか転生させてくれた神様と向こうの皆が見える……待って
俺もそっちへ行くよ！

「戻ってきなさい！」

『良太郎。』

「ドラゴンス何か用？」

『いや……まあ、アレだ。ありがとう。』

「えーつと何が？」

『別に分からないならいい。もうデンライナーに戻る。』

「あ、待って！」

『何？』

「ドラゴンズが何を思っているのかは分からないけど……辛いなら僕たちに言ってみて。それくらいのことではしてあげられると思っから。」

『……ありがとう。』

拜啓 向こうの世界の皆様。

オレが転生したのが良いことか悪いことか分かんないけど……もう少しかだけ頑張ってみようと思います。

敬具

ドラゴンズより